アクセクリズム

under_

目次

スピードは正義……3
売れない作家の副業……9
歌う英雄……21

歌う英雄

1

仕事終わりの会社員や飲み会へ向かう学生たちが行き交う夜のターミナル駅。
その入り口に立った森太郎は、大きく息を吸い込むと、アコースティックギターの弦をそっと鳴らし始めた。
三秒ほどの前奏に続いて、歌い出す。

ふとした衝動で走り出す、十五の夜　通り過ぎたティルランプを闇雲に追いかけた
邪魔だと罵声を浴びても、気にせず前だけを見ていた

歌のテンポに合わせ、ギターの音をゆっくりと響かせていく。

少年時代は過ぎ去って、未来を見ていた眼差しは現実へ
礼儀を弁えない若者に、邪魔だと悪態をついている

抑えていた音量を一気に上げ、テンポアップした。

オー、ナンセンス、ナンセンス！
こんな大人になるまいと、思っていたのは遠い昔
オー、ナンセンス、ナンセンス！

再びテンポダウン。最初よりも抑えた声量で歌う。

ふと振り返ると、昔の自分が笑っていた

一曲歌い切っただけだったが、太郎の額は汗で一杯だった。夜になっても残暑が厳しいという理由もあったが、そもそも太郎の歌は、一曲歌うだけで相当なエネルギーを消費する。
太郎にとって歌は遊びではない、彼は人生を賭けていた。
そっと顔を上げ、周囲を見渡す。
足を止めてくれる観客は一人もいなかった。
路上ライブをしたところで、ほとんどは素通りだが、長いことやっていれば、たとえ一瞬でも足を止めてくれる人はいるものだ。
太郎はもう数曲歌ったが、一向に人は集まらない。それどころか、ここがターミナル駅前だと思えないほど、人の波が綺麗さっぱり消えてしまっていた。
「……今日も、か」
太郎は小さくため息をついた。
五年以上路上ライブを続けていて、ずっとこの調子だ。ただの一度も、耳を傾けようと足を止めてくれる人は現れない。
歌うのを止め、ペットボトルの水で喉を潤していると、人流が戻り普段のターミナル駅の活気が戻ってきた。これではまるで、人々が太郎の歌を避けているかのようだ。
楽器を持った二人組の若い男たちが太郎から十メートル

ほど離れたところで立ち止まった。太郎と同じストリートミュージシャンだろうか。まだ二十歳にもなっていない少年と言えるほどの若さだ。彼らが演奏の準備を始めると、たちまち人々が輪を作り始めた。二人組が歌う準備を整えた頃には、かなり大勢の人集りになっていた。

観客は拍手を二人組に送った。マイクを握った少年が手を振って、声援に応えた。

「みんなありがとう！　今日も何曲かお送りしたいと思いますがその前に、お知らせがあります。みなさんの応援のおかげで、今度、単独ライブをやることになりました！」

万雷の拍手が沸き起こった。

「それから、もう一つ。なんと、今度Ｓレコード会社からＣＤデビューが決定しました！」

更に大きな拍手が送られた。それが呼び水となって、二人組シンガーの前にますますたくさんの人が集まっていく。

太郎は二人組の観客たちから顔を背けると、乱暴にペットボトルを掴んで、残りの水を飲み干した。

そして、大きなため息。

「……今日は帰るか」

ギターをケースにしまうと、鳴り止まない拍手を背にして、その場を去った。

2

ターミナル駅を離れた後も、「ＣＤデビューが決定しました！」と嬉しそうに話す、ボーカルの少年の言葉が、太郎の耳から離れなかった。

そのまま自宅アパートに帰るのは辛かった。コンビニで缶ビールを買って、近くの公園のベンチに腰を下ろした。

砂場では、残り少ない夏を目一杯楽しもうと、手持ち花火で遊んでいる子どもたちとその親の姿が見えた。

缶ビールの蓋を開け、一口喉に流し込んだ。歌い終わった後のビールは最高に気持ち良いはずであるべきなのに、苦味だけが喉にひっかかるように残り続けた。

「ああ、くそっ！」

太郎は、花火で遊ぶ子どもたちの背中へ睨むような視線を向けた。

――どうして俺はここまで相手にされないのか……。

太郎は来月で二十六歳の誕生日を迎える。焦っていた。大手音楽会社からメジャーデビューできる年齢は二十五歳くらいまでと言われていた。歌なんて何歳になっても歌える、努力していればチャンスなんていくらでもあるさ、などと言う者もいるが、現実は甘くない。音楽会社は若くて才能のある、売れる歌手を求めているのだ。

タイムリミットは間近に迫っている。

音楽で生きていくのが太郎の夢だ。小さな頃から歌うのが大好きで、高校生の時に本格的にギターを始めた。大学生になると授業そっちのけで、路上ライブを始めた。卒業後、同級生たちが妥協を重ねた結果として普通の会社に勤め始めるなか、太郎だけは夢を追い続けた。アルバイトで

糊口をしのぎつつ、毎週欠かさず路上ライブを繰り返し、チャンスを待っていた。

しかし運命の女神は一向に微笑んでくれる気配がなかった。足を止める観客が現れるどころか、歌い始めるなり蜘蛛の子を散らすがごとく逃げていく。

太郎の歌がどうしようもないほど下手なのであればしかたがない。歌手になるという夢も潔く諦めただろう。しかし、太郎の歌はデビューを決めた二人組に負けてはいない。これは決して、太郎自身が自惚れているだけではない。

事実、太郎は動画サイトにも曲をアップしているが、まずまずの再生数を誇り、しかも高評価が多い。フォレスタという太郎のアカウントは、ネット上においてはそこそこ認知されている。

だが、太郎はそれだけでは満足できなかった。ちゃんとした生歌をみんなの前で歌い、聞かせたいという願望があり、路上ライブを続けていた。しかし、そちらの客足はさっぱりだった。動画のコメントで、今度路上ライブにも行ってみたいと書かれていても、実際に人が来た試しはない。

何が悪いのか？　と、太郎は大いに悩み、さまざまな手を打ってきた。最初は本名の森太郎というありふれた名前にインパクトがないのではと思い、ＴＡＲＯやら円光寺大二郎やら芸名を変えてみたがうまく行かず、今はネットのアカウントと同じフォレスタで統一している。それ以外にも、イメチェンで髪を白に染めたり（バイト先に怒られて三日で元の色に戻した）、服装も派手にしてみたりしたが（資金がなくて見るも無惨な結果に終わった）、効果はなかった。自作の歌詞だけではなく、ポピュラーソングをカバーしても、状況はまったく改善しなかった。

路上の他にもライブハウスの合同ライブに参加したこともある。太郎の出番の直前まで、観客たちは熱狂の渦に包み込まれていたが、太郎が歌い始めた途端、波が引くように全員帰ってしまった。それ以来、主催者側から合同ライブの参加を拒否されるようになってしまった。

こうして、時間だけがいたずらに過ぎていった。

最近ようやく、諦める、という言葉が脳裏をちらつくようになった。バイト先の店主からは本気でうちの仕事を手伝ってくれないかと言われているし、数少ない友人からは、今の太郎の状況に対して冷ややかな視線を向けられていた。

それでも、まだ踏ん切りがつかなかった。あれだけ動画サイトで評価されているのだ。何か、きっかけさえあれば、逆転サヨナラ満塁ホームランが打てるのではないか？　と思わずにはいられない。

太郎は缶ビールを飲み干すと、ケースからギターを取り出した。

――昔は花火で遊ぶ子どもたちのように、キラキラとした目で、希望に満ちていた。それなのに……。

太郎はギターを鳴らし始めた。

ふとした衝動で走り出す、十五の夜　通り過ぎたティルランプを闇雲に追いかけた

すると、遊んでいた子どもたちは、まだ火がついた状態の花火を手にしたまま、公園から走り去ってしまった。更に太郎の目の前を横切ろうとした猫が、「ふぎゃーっ！」と苦しげな悲鳴をあげると、倒けつ転びつ逃げていってしまった。

公園には、太郎だけが取り残されてしまった。

「何が……、何がだめなんだ」

太郎はギターを膝に置くと、両手で顔を覆った。

3

太郎は空になった缶ビールを握りつぶして、屑カゴに向かって投げ入れた。しかし、缶はカゴの縁に当たって、足元に戻ってきてしまった。大きく舌打ちしながらベンチから立ち上がり、缶を屑カゴに思いっきり叩きつけた。

「ダンクシュート！　太郎選手、リバウンドからの逆転ゴールです！　会場は大歓声だ！」

などと、苛立ちを紛らわせようと声を張り上げたその時、公園の隅にある大木の影に、一人の女性の姿を認めた。体の大半は木の影に隠れていたが、顔だけはしっかりと太郎の方を見つめていた。

次の瞬間、太郎の顔は熱した鉄のように赤くなった。

すぐさま女性に背を向け、荷物を持って公園の出口へ足を向けた。

すると、背後から女性の声が聞こえてきた。

「まっ、待ってください！」

何かを必死に訴えかけるような声に、太郎の足はピタリと止まった。そして、彼の脳裏に一つの単語が浮かんだ。

……ファン！

ついにリアルなファンが目の前に現れたのだ。長く辛い音楽人生だったが、ついに報われる時が来たのだ！

慌てて、顎を上下させて顔面の筋肉を緩めると、笑顔で振り返った。

「なんでしょう、お嬢さ……ん？」

太郎の口が途中で止まってしまった。公園の外灯に照らされた女性は、二十歳くらいで、肩まである真っ直ぐな黒髪は艶やかで綺麗だ。そこまでなら綺麗な女性で済むのだが、奇妙なのは、まず彼女の顔に描かれた不思議な刺青だ。目元から口元へ向かって青い逆三角形の模様が描かれている。さらに、麻のワンピース状の服を着ていたが、とても流行とは言えない見慣れぬ模様が至る所に描かれていた。そして、耳に大きな石のイヤリング。この姿、昔どこかで見たような……、そう、歴史の教科書だ。古代の縄文人、あるいは外国の先住民の絵にそっくりだ。

彼女は仮装大会の帰りなのだろうか？

「どうかしました？　わたしの顔をじろじろと見て？」

女性からの質問に、太郎は慌てて視線を逸らした。あまりジロジロ見るのも失礼だろう。

「いやっ、なんでもない。で、俺に何か用？　サイン？」

どんな格好であれ、ファンはファンだ。しかもリアル第一号！　飛び跳ねたい気持ちをぐっと抑え、クールな雰囲気を醸し出そうと、太郎はそっけない声で言った。
「サイン……？　いえ、そんなのは結構です」
一気に膝の力が抜け、太郎は危うくその場でずっこけそうになった。
「大丈夫ですか！　急に顔色が悪くなったようですが」
「あっ、はっ、はい……」
一瞬、成層圏まで舞い上がっていた心が地面に激突して、今すぐベッドでふて寝したい気分だった。
「すいません、わたしはただ訊きたいことがありまして……」女性は改まった口調で続けた。「あなた今、歌を歌っていましたよね」
「ええ」
なにせ俺は歌手希望ですから、とは言わずにおいた。聞いた人間全員いなくなるような歌声で、よく歌手なんて名乗れますね、なんて、この精神状態で問い詰められたら、もう立ち直れそうにない。
「……それがなにか？」
すると女性は、突如、潤んだ瞳を太郎の口元へ向けた。
「その歌、とても凄いです！」
「えっ？」
彼女の体が外灯よりも強く輝き始めたような気がした。
再び太郎の心はスタート直後のジェットコースターのように急上昇を始めた。

女性は一歩太郎に近づいた。ほのかに若草の匂いが漂ってきた。
「どうか、その歌の力で、わたしたちを助けてください」
助けてください？　俺の歌で儲けさせてください……つまり、まさかメジャーデビューの誘いか！
今や心は宇宙空間を飛び出し、無重力にふわふわと漂っているような心地だった。
「も、もちろんです！」
クール設定キャラも忘れて、新人運動部員のようにハキハキとした声で叫んだ。
「ありがとうございます」
女性はにこりと微笑むと、太郎の手をぎゅっと握りしめた。暖かく柔らかい感覚に、太郎は鼻血が出そうなほど顔が熱くなってきた。
「あなたの歌に込められた人払いの魔法があれば、わたしたちの村は救われるでしょう」
女性は空いている方の手で、大きなイヤリングを握った。
「えっ、人払い？　魔法？」
太郎の脳裏に大きなクエスチョンマークが浮かんだ次の瞬間、目の前が真っ白になった。

4

夜の公園にいたはずが、頭上に大きな太陽が鎮座していた。周りには遊具も民家も見えない。背の低い野草が広が